

小・中・高 12 年間を繋ぐキャリア教育の実践に資する教員研修モデルの考察

義務教育研修課	主任指導主事兼課長	早瀬	幸二
	主任指導主事	平野	雅子
	指導主事	深坂	眞士
高校教育研修課	主任指導主事兼課長	藤後	泰祐
	指導主事	栗田	堅介
	指導主事	小口	洋平

キーワード： キャリア教育 「キャリア・パスポート」 校種間連携 教員研修

はじめに

平成 29・30・31 年改訂の小学校・中学校・高等学校学習指導要領では、「児童（生徒）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」と示され、小・中の学級活動と高等学校のホームルーム（以下、HR という）活動において、「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」（以下、小・中は学級活動(3)、小・中・高は学級（HR）活動（3）という）が新たに設けられた。また、振り返って気付いたことや考えたことなどを、児童生徒が記述して蓄積する「ポートフォリオ的な教材のようなもの（後の「キャリア・パスポート」¹⁾）を活用すること」が示され、キャリア教育は発達段階に応じた系統性がさらに重視される方向へと新たな展開を見せている。

本県では、平成 27 年度からキャリアノート²⁾、令和 2 年度から「兵庫版『キャリア・パスポート』」³⁾（以下、「キャリア・パスポート」⁴⁾という）を導入するなど、学年・校種を越えたキャリア教育を推進してきた。しかし、令和 4 年度に実施した実態調査からは、「キャリア・パスポート」が各学校に少しずつ定着しているものの、活用が不十分であることや、キャリア教育に関する認識や取組に校種間で差があること等の課題が明らかになった。小学校から高等学校へ児童生徒の学びを繋ぐキャリア教育を充実させるためにも、これらの課題に対応した教員研修プログラムを開発することが急務であると考えられる。

1 12 年間を繋ぐキャリア教育に関する研修の必要性

(1) キャリア教育に関する教員の指導力向上

前述の通り、現在は、体系的・系統的にキャリア教育を推進することが求められている。しかしながら、推進する教員の意識や理解は、それに対応できているのだろうか。

昨年度実施したキャリア教育推進講座⁵⁾を受講した複数の教員から、「自分が実践していたのはキャリア教育というより、その中の進路指導でしかないと気付いた。」という感想が見られたように、キャリア教育に対する認識が曖昧で、キャリア教育を進路指導や職業教育と混同している教員も一定数いるのが実情である。

キャリア教育に対する教員の理解が不足していることは、本県に限らず指摘されてきたことである。2011（平成 23）年 1 月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、発達の段階に応じた体系的なキャリア教育の充実に向けた方策の一つとして、教職員の意識や指導力の向上が挙げられている。そこでは、

「初等中等教育段階からキャリア教育を進める際の課題の一つとして、その意義・必要性に対する教員の理解が不足しているという」という指摘がなされ、「教職員一人一人が自ら担当する教科・科目や教育活動の中で具体的に実践できる力を高めることが必要である」とされており、このための教職員の研修の充実が求められている。

(2) 本県のキャリア教育の取組に関する現状と課題

本県における取組として、当教育研修所においては平成 20 年度から、希望する教員を対象としたキャリア教育に関する研修を実施している。県全体としては、2015（平成 27）年 3 月に「キャリアノートモデル（小・中学校）」「高校生キャリアノート（高等学校）」「教師用指導資料」を作成するとともに、平成 27 年度から 6 年間、キャリア教育担当者等を対象とした悉皆研修、研究協力校による実践研究等、キャリア教育に関する指導力向上を図ってきた。さらに、平成 31 年度には、「兵庫版『キャリア・パスポート』」を作成し、12 年間を見通した体系的・系統的なキャリア教育の充実に努めている。

令和 4 年度からは、「小・中・高 12 年間を繋ぐキャリア教育充実事業」として、「兵庫版『キャリア・パスポート』を活用した授業の充実」、「中高における学びの連続性を意識した兵庫版『キャリア・パスポート』の活用」、「実態把握に基づく県全体での取組の工夫・改善」に取り組んでいる。「令和 4 年度キャリア教育実態調査」（令和 4 年 11 月に抽出校 100 校⁶⁾に対して実施）からは、小・中学校の約 95%の教員が学級活動(3)の授業において「キャリア・パスポート」の作成時間を確保しており、令和 2 年度から導入された兵庫版「キャリア・パスポート」が少しずつ定着していることがうかがえた。

一方、学級活動(HR)(3)の授業において、以前に児童生徒が書いたキャリアノートや「キャリア・パスポート」を活用していると回答した教員は、小学校教員 69.1%、中学校教員 68.5%、高等学校教員 27.5%に止まった。

2023（令和 5）年 8 月に本県で実施した「令和 5 年度キャリア教育に関する中高意見交換会」⁷⁾の中で、「キャリア・パスポート」の活用の意義についての説明の後、活用の実態について、中・高の教員が協議を行った。その中で、例えば、「中学校から引き継いだ活用できていない」、「キャリア・パスポートを紛失する生徒がいる」といった課題等が出され、実際の活用の実態についての協議は少なかった。「キャリア・パスポート」の円滑な接続のためには、出された課題等への対応を検討することも必要ではある。しかし、キャリア教育や「キャリア・パスポート」の意義について、校種間の共通理解が図られておらず、各校の事例を持ち寄り交流したり、効果的な活用について協議したりする段階に至っていない学校がある現状がうかがえた。

これらのことから、「キャリア・パスポート」に児童生徒が記入する取組は行われているものの、その活用において課題があることが分かる。さらに、校種間連携を図る上で、小学校・中学校と高等学校それぞれでの教員の認識や学校の取組に差がある等、本県の小・中・高 12 年間を繋ぐキャリア教育の実践において、校種間の接続にも課題があるといえる。これについては、国立教育政策研究所（2020）においては、校種間の比較から見えるキャリア教育の現状と課題の中で、「キャリア・パスポート」の「校種を越えて持ち上がる」機能の充実については喫緊の課題であると指摘されている。

(3) 研究目的

キャリア教育に関する研修は、文部科学省や都道府県の教育センター等が、研修用動画コンテンツや資料を作成し一定程度整備されているといえる。他にも、国立教育政策研究所の生徒指導・進路指導研究センターからは数々の教員向けパンフレットが提供され、多

くの事例も紹介されている。それにも関わらず、教職員の意識や指導力の向上が必要とされている現状があるということは、教員がキャリア教育についての理解を深める過程に即した研修内容や、研修において有効な視点を明らかにする必要があるのではないだろうか。

さらに、体系的・系統的なキャリア教育の充実のためには、「キャリア・パスポート」の活用や校種間連携における課題に対応した教員研修のモデルが必要である。

よって本研究は、体系的・系統的なキャリア教育に資する教員研修には、どのような内容や要素が必要か、またどのような視点が有効かを明らかにすることを目的とする。そのために、現状と課題から導いた教員研修に必要と考えられる内容や要素を想定し、当県立教育研修所で主催する研修を実施する。そして想定した研修内容によって、受講者はどのように理解が深まり、どのように認識が変容したのか、研修の効果を分析する。

また、教員がキャリア教育に対して感じている難しさやニーズに対応した研修にするために、研修受講者に対してアンケート調査を行い、教員のキャリア教育に対する認識や、実践する上で感じている難しさ等の実態を明らかにする。加えて、校内研修等を含めた汎用的な研修を想定し、広く中堅教員⁸⁾に対してアンケート調査を実施することで、個々の教員が感じる難しさや求める研修内容といったニーズに対応した研修について考察する。

2 体系的・系統的なキャリア教育に資する教員研修モデル案の作成と実施

(1) 教員研修モデル案の作成

前述した種々の調査結果や、キャリア教育に対する教員の現状から、キャリア教育に対する教員の現状から見える課題を表1に整理した。

その上で3項目（A・B・C）に分類した研修内容に対して、課題に対応すると想定される研修の要素を設定し、研修講座で実施する教員研修モデル案（表2）を作成した。

表1 キャリア教育に対する教員の現状から見える課題

課題①	キャリア教育の意義・必要性に対する理解が不足している。
課題②	キャリア教育に対して矮小化された認識がある。
課題③	教科・科目や教育活動が、キャリア教育の一部に繋がっていることが意識できていない。
課題④	学級活動（HR）(3)の授業で、過去に書いた「キャリア・パスポート」を効果的に活用できていない。
課題⑤	兵庫版「キャリア・パスポート」を形式的に持ち上がるだけになっている。

表2 教員研修モデル案

研修の内容	A キャリア教育の概要に関すること	B キャリア教育の実践に関すること	C 体系的・系統的なキャリア教育に関すること
研修の要素	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育の意義 キャリア教育の定義 基礎的・汎用的能力 キャリア発達 	<ul style="list-style-type: none"> 「キャリア・パスポート」の活用 特別活動を要としたキャリア教育 キャリア教育の改善 	<ul style="list-style-type: none"> 学年や校種を越えた学びの接続（縦のつながり） 教科・科目や教育活動を通じた学びの接続（横のつながり）
対応する課題	課題①理解不足 課題②矮小化	課題③教科や科目での意識 課題④活用、課題⑤持ち上がり	課題③教科や科目での意識 課題④活用、課題⑤持ち上がり

(2) 研修の実施（キャリア教育推進講座）

上記のモデル案を基に、「キャリア教育推進講座」を実施した（2023年8月）。小・中学

校教員を対象とした研修と、高等学校教員を対象とした研修を同日開催し、講義と協議を合同で実施し、演習は校種の特徴に合わせて各々で行った。

(小中) キャリア教育推進講座は、小学校教員 35 名、中学校教員 28 名、特別支援学校教員 6 名が受講し、(高) キャリア教育推進講座は、高等学校教員 22 名、特別支援学校教員 13 名が受講した。受講者の多くが中堅教諭等資質向上研修の一つとして受講している中堅教員であった。また、当研修の成果等を検証するために実施したアンケート（以下、研修アンケートという）から、受講者の約 6 割が今までに学校の分掌でキャリア教育を担当したことがなく、学校の取組状況や担当経験の有無に関係なく 9 割以上が難しさを感じていることが分かった。

キャリア教育のどのような点に難しさを感じているか、受講前の認識についての自由記述を整理したものが以下の表 3 である。▲のように、「キャリア教育とは何なのか理解できていない」、「どのようなことをすればよいかわからない」ことで難しさを感じている教員がいる一方、●のように、一定の理解をしているからこそ、「キャリア教育への変換に難しさ」を感じたり、「体系的に進めるもの」と理解しているからこそ難しさを感じたりしている教員がいるという現状が伺え、難しさの質には違いが見られた。

表 3 教員がキャリア教育に対して感じる難しさ

カテゴリー	項目	具体的な記述例
キャリア教育を理解する上で感じる難しさ	キャリア教育の定義や内容	▲キャリア教育とは何なのかをあまり理解していない。 ▲具体的に何をどうすることがキャリア教育なのか理解できていないところがある。
児童生徒に起因する課題に対して感じる難しさ	児童生徒の実情	・将来のことを深く考えられていない生徒が多く、温度差を感じる。 ・進学先や就職先の選択肢が少なく、将来について考える意欲が低い ため、取り組んでいるほど効果が出ていないように感じる。 ・生徒の特性に合った指導が難しい。
実践する上で感じる難しさ	身に付けさせたい力の焦点化	・身に付けさせたい力が幅広く、漠然としている。
	キャリア教育の実践における具体	▲教科書のように統一して指導する教材があるわけではないので、どのようなことをすればよいか分からない。 ▲具体的な取組を知らないで、活動がイメージできない。 ●今までの進路学習からキャリア教育へと変換していくことに難しさを感じる。 ●様々な分野の学びを含むので、生徒の実情などに合わせて考える必要があると思う。
	「キャリア・パスポート」の活用	・「キャリア・パスポート」を記入するだけになっている。 ・「キャリア・パスポート」がうまく活用できていない。
	アウトカム評価	・キャリア教育で目指す力を身に付けさせられたのかを判断・評価することが難しい。
	学校全体での取組と教員の共通理解	・学校全体で取り組めていない。 ・校内での教員の共通理解ができていない。 ・教員の理解に差があるので、足並みを揃えることが難しいと感じる。 ・学校として系統立った取組が実践できていない。
連携上の難しさ	連携方法と校種を越えた共通理解	・小・中・高がどのように連携していけばよいか、いまいち分からない。 ・小・中・高が連携するために、共通理解を図ることが難しい。
その他	研修の機会の少なさ	・キャリア教育の指導について研修を受ける機会が少ない。

(3) 研修内容と目的

研修は、社会的自立に向けたキャリア形成と自己実現のための体系的・系統的なキャリ

ア教育の在り方について理解することをねらいとした。研修内容を表4に示す。

表4 キャリア教育推進講座 研修内容

対象	時間	タイトル	内容
小・中学校 高等学校 合同	講義 120分	体系的・系統的なキャリア教育の 充実に向けて ー学びをつなぐキャリア教育の 意義ー	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育が必要とされる背景 ・キャリア教育の定義 ・進路指導とキャリア教育 ・基礎的・汎用的能力 ・子ども・若者のキャリア発達 ・職業に関する体験活動の教育効果 ・学級（HR）活動 ・「キャリア・パスポート」 ・教師の目的と意図をもった言葉かけ ・教育振興基本計画におけるキャリア教育
小・中 ／ 高	演習 160分	特別活動を要としたキャリア教育 ・特別活動を要としたカリキュラム ・兵庫版「キャリア・パスポート」 を活用した学びの接続	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育に対するイメージ ・キャリア教育の視点からの振り返り ・特別活動を要としたキャリア教育 ・学級活動における学習過程 ・兵庫版「キャリア・パスポート」を活用した学級活動（3）の授業動画視聴 ・学級活動（3）において必要なこと ・兵庫版「キャリア・パスポート」の意義（横のつながり・縦のつながり） ・兵庫版「キャリア・パスポート」を学年や校種を越えて繋ぐ工夫と活用アイデア ・学級活動（3）のテーマと、兵庫版「キャリア・パスポート」を活用した展開
校 種 別	発表 60分	キャリア教育の充実に向けた取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校におけるキャリア教育の在り方 ・兵庫版「キャリア・パスポート」を活用した取組
	演習 85分	兵庫版「キャリア・パスポート」 の活用について ・キャリア発達を促す取組を考え る	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育の実践例 ・兵庫版「キャリア・パスポート」の活用状況 ・基礎的・汎用的能力 ・兵庫県高等学校版キャリアノートモデル ・縦の繋がりを意識したキャリア発達を促す取組
小・中学校 高等学校 合同	協議 30分	兵庫版「キャリア・パスポート」 を活用した小・中・高一貫した取 組に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・各校種での兵庫版「キャリア・パスポート」の活用についての情報交換 ・内容面での引き継ぎの充実方策の検討

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官による講義「体系的・系統的なキャリア教育の充実に向けて」では、キャリア教育が必要とされる社会的背景やキャリアの理論を踏まえて、キャリア教育の概要について受講者は理解を深めた。後半は、児童生徒の「キャリア・パスポート」の記述等を読むことで、学級活動（HR）活動で「キャリア・パスポート」を用いることの意義への気付きが見られた。講義全体を通して、体系的・系統的なキャリア教育の重要性を認識していく様子が見られた。

講義を受けて、（小中）キャリア教育推進講座は特別活動を要としてキャリア発達を促す指導の工夫について理解すること、（高）キャリア教育推進講座はキャリアノートや「キャリア・パスポート」の効果的な活用法について理解することをねらいとした演習を実施した。これは、小・中学校では一定程度「キャリア・パスポート」が活用されているが、高等学校では活用率が低いという実態に合わせて、演習の内容を設定したものである。

いずれも、講義を通して理解した内容を、実践と結び付けて考えることを意図した点は共通している。また、それぞれの演習の中で、「キャリア・パスポート」の活用アイデアや、

学級活動（HR）（3）での活用例を考える時間を設けたことで、受講者はそれらの活用アイデア等を持ち寄ることができた。

その後、小・中・高・特の教員が校種を越えて「内容面での引継ぎをどう充実させるか」という観点から協議を行ったことで、小・中・高一貫した取組について考えを深めることに繋がったと考えられる。これは、前述した「キャリア教育に関する中高意見交換会」の様子から、単に異なる校種の教員が協議を行っても、意義の理解や活用面で課題がある現状では、議論が空回りするのではないかと考えた結果である。

これらの工夫によって、受講者は校種を越えて活発に協議を行い、異なる校種の取組や活用例に触発されて、自校の取組の新たなアイデアや改善策に気付いていく様子が見られた。このように小・中・高・特の教員が協議をする機会は少なく、どの校種の教員からも「他校種の取組や活用例はとても参考になり良かった」という意見が聞かれた。

3 キャリア教育の教員研修に必要な視点に関する考察

上記の研修で実施した研修の振り返り（詳細は64～65ページ）及びアンケートに加えて、小・中学校の中堅教諭資質向上研修受講者 275 名に実施したキャリア教育に関するアンケート（以下、中堅研受講者調査という）を基に、キャリア教育の教員研修に必要な視点を、前述の教員研修モデル案（表 2）に示した A～C に沿って考察する。

(1) 「A キャリア教育の概要に関すること」

研修の振り返りでは、研修に必要な要素と実際に行った研修のいずれの内容のいずれについても言及が見られたが、特に「キャリア教育とはこういうものだと考えた」等、キャリア教育の定義に関わることへの言及が多かった。中でも、今までにキャリア教育にそれほど取り組めていなかった教員や、キャリア教育を狭義の意味で捉えていた教員ほど、意識の変容が大きいことがうかがえる。また、「進路指導と混同している」という狭義の捉えであった教員が、キャリア教育は教育活動全体に関わっているという気付きを得たことで、充実させるための方策を考えることに繋がったと推測される。

また、振り返りからは、矮小化されたキャリア教育に対する認識が変容したことによって、勤務校のキャリア教育をキャリア教育の視点⁹⁾から見直そうとしていることが推測された。

中堅研受講者調査において、表 5 に示す 10 項目のうち、自分にとって必要だと思う研修内容の項目について 5 つを上限として選択した結果、「キャリア教育に難しさを感じている」教員の方が、キャリア教育の概要に関する研修内容を必要としていた。

これらは、表 1 の課題①で挙げた「キャリア教育の意義・必要性に対する理解不足」のとおりであり、「キャリア教育の意義」、

表 5 自分にとって必要だと思う研修

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">①兵庫版「キャリア・パスポート」を通じて、校種間の学びや成長を繋げること。②振り返りなどの際に、キャリアノートや、兵庫版「キャリア・パスポート」を活用すること。③キャリアノートや兵庫版「キャリア・パスポート」に対してコメントを返すこと。④キャリア教育を通して児童生徒に身に付けさせたい力を意識して教育活動を行うこと。⑤児童生徒が自らの成長を実感できるようにすること。⑥児童生徒が自分自身の課題を把握したり、将来について考えられたりするようにすること。⑦キャリア・カウンセリングを通して、個別の支援を行うこと。⑧学年間の学びをキャリア教育の視点で繋げること。⑨各教科等の学びをキャリア教育の視点で繋げること。⑩児童生徒が個々の学びを繋げられるように、学級活動を工夫すること。 |
|---|

「キャリア教育の定義」、「基礎的・汎用的能力」、「キャリア発達」といった基本的な要素を理解していく中で、自身のキャリア教育に対する認識が、キャリア教育の一部でしかなかったことへの気付きが見られた。この矮小化されたキャリア教育に対する認識そのものも、表1の課題②として挙げたとおりであるが、キャリア教育と進路指導との関係を整理して理解することによって、教員がもつキャリア教育に対する認識の変容を促すことができたと考えられる。よって、課題①と課題②に対応するキャリア教育の概要に関するAの研修では、教員のキャリア教育に対する認識の変容を促すという視点から、研修を計画することが重要であると考えられる。

今回の研修内容には、キャリア教育の改善に関する要素や、キャリア教育の全体計画や年間指導計画の立て方や見直し方等の要素を含んでいなかったが、この概要に関するAの研修内容から、キャリア教育の見直しや改善へと繋がる研修へと発展させることで、教員の理解を深める過程に即した研修になると考えられる。

(2) 「B キャリア教育の実践に関すること」

ア 兵庫版「キャリア・パスポート」の効果的な活用

研修の振り返りでは、「キャリア・パスポート」に関する言及が多く見られた。意義を理解したことで、現状の取組を省みたり、活用場面の工夫や指導の工夫について考えたりすることに繋がったと考えられる。また、児童生徒理解に「キャリア・パスポート」が寄与すると気付いた教員も複数いることから、キャリア教育の意義を考える上で、児童生徒理解に繋がるという視点は有用ではないかと考える。

一方、中堅研受講者調査では、「意識して取り組んでいること」として、「①キャリア・パスポートによる学びの接続(56.7%)」、「②振り返りでのキャリア・パスポート等の活用(58.5%)」が挙げられているものの、「キャリア・パスポート」の意義について、「だいたい分かっている」と回答した教員は12.0%であった。「キャリア・パスポート」を児童生徒に記入させてはいるものの、教員がその意義をよく分かっていることがうかがえる。

イ 特別活動を要としたキャリア教育

特別活動を要としたキャリア教育については、小・中学校の研修において、学級活動(3)の具体を演習で取り上げたが、研修アンケートでは、新たに取り組みたいこと(「既に意識していること」以外から選択)として、全体的に見て最も割合が高かった項目は、「個々の学びを繋げられるように学級活動を工夫すること(32.1%)」であった。自由記述の中には、「もっと学級活動の実践例を知りたい」という意見もあったことから、「キャリア・パスポート」の意義や重要性と、一部の活用法については理解できたが、一時間の授業をどう構成するかまでは、考えが及んでいない教員が多いのではないかと考えられる。

中堅研受講者調査においても、「キャリア教育に難しさを感じている」教員の「④キャリア教育を意図した学級活動」についての理解度が低く、「あまり感じていない」教員との差が顕著に見られた。

「キャリア・パスポート」に関しては、小・中学校の約95%の教員が学級活動(3)の授業において「キャリア・パスポート」の記入時間を確保しているという実態はあるが、教員が「キャリア・パスポート」の意義をよく理解していない現状を鑑みると、教員も児童生徒のどちらも、キャリア教育の要となる特別活動、とりわけ学級(HR)活動(3)の意義を理解しないままの実践になっていることが危惧される。それは、自由記述の中で複数書かれていた『「キャリア・パスポート」を書かせて終わりだった」という反省とも一致する。

これらのことから、数字の上で「キャリア・パスポート」の記入や引き継ぎが行われて

いることに安心せず、意義の理解に加えて、記入させる場面での教員の働きかけや指導の工夫が、研修の要素として必要と考えられる。そのために、児童生徒が書いた「キャリア・パスポート」等の具体物を用いるなどして、実際にどのような説明や言葉がけをした上で記入させるか等も含め、指導の工夫を考えるという視点から研修を計画することが必要である。具体を知ること、**「学級活動（HR）（3）の授業で、過去に書いた「キャリア・パスポート」を有用に活用できていない。」**という表1の課題④に対応した研修の要素と考えられる。

また、特別活動を要としたキャリア教育という言葉の裏を返せば、特別活動以外でのキャリア教育も多々あるということでもある。キャリア教育に対する認識の広がりによって、教科・科目におけるキャリア教育の実践や、キャリア教育の視点からの教育活動の見直しに繋がり、引いては表1の課題③として挙げた**「教科や科目での意識」**に繋がると考えられる。

(3) 「C 体系的・系統的なキャリア教育に関すること」

研修では、「キャリア・パスポート」の活用アイデアや、学級活動（HR）（3）での活用例を考える時間を設けた上で、校種を交えて協議する時間を設けた。

その結果、研修の振り返りでは、学びの接続への言及が多く見られた。研修アンケートにおいても、新たに組みたいこととして、「各教科等の学びをキャリア教育の視点で繋ぐこと（31.0%）」、「学年間の学びをキャリア教育の視点で繋げること（28.6%）」、「『キャリア・パスポート』を通じて校種間の学びを繋ぐこと（27.4%）」を選択した教員が多かった。

特に、新たに組みたいこととして、高等学校の教員の52.9%が、「兵庫版『キャリア・パスポート』を通じて校種間の学びを繋ぐこと」を選択していた（小：21.4%、中：18.5%、特：25.0%）。既に「キャリア・パスポート」等を活用した取組が一定程度行われていることが推測される小・中学校と比べ、高等学校の教員のキャリア教育に対する意識の低さは、課題として挙げていたことであるが、振り返りの記述や研修アンケートから、高等学校の教員の理解を深め、意識を変容させる上でも、この研修は一定の効果があったといえる。高等学校の教員に限らず、全ての校種の教員にとって、違う校種の実践を知ること、学びを繋げることの意義について実感を伴って理解することに繋がった。その際、「内容面での引継ぎをどう充実させるか」という観点から協議を行ったことが功を奏したと考えられる。

また、「キャリア・パスポート」の意義や必要性を理解することと、特別活動を要としたキャリア教育の意味を理解することは、児童生徒の学びを繋ぐ意義の理解という点で共通している。これらの要素を理解することが、学年や校種を越えた学びの接続（縦のつながり）と、教科・科目や教育活動を通した学びの接続（横のつながり）の必要性への気付きに繋がったと考えられる。

このように、異なる校種の取組を知り、効果的な活用を考え実践に生かすことは、体系的・系統的なキャリア教育の充実を図るために、非常に大きな役割を果たす。

そのため、キャリア教育を系統的に捉え、12年間を繋ぐキャリア教育の意義や有用性を実感できるようにするために、小・中・高・特の教員が校種を越えて協議する場を設け、異なる校種の取組を知ったり、効果的な活用を考えたりする研修が大切である。このような研修によって、兵庫版「キャリア・パスポート」を形式的に持ち上げるだけになっている。」という表1の課題⑤に対応できると考える。

(4) キャリア教育の教員研修の充実に向けて

上記(1)～(3)を踏まえ、キャリア教育の教員研修に必要な視点を表6に示す。

表6 キャリア教育の教員研修に必要な視点

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①教員のキャリア教育に対する認識の変容を促すことを意図する。②学年や校種を越えた接続・連携の必要性を認識できるように、児童生徒が書いた「キャリア・パスポート」等の具体物を用いる。③授業映像等のコンテンツを利用する等、学級(HR)活動(3)における兵庫版「キャリア・パスポート」の具体的な活用事例を示す。④児童生徒の気付きや学びを繋げることの意義について実感を伴って理解できるように、児童生徒への声かけやコメントを具体的に考える等の実践的な内容を取り入れる。⑤キャリア教育を系統的に捉え、12年間を繋ぐキャリア教育の意義や有用性を実感できるように、小・中・高の教員が校種を越えて建設的な協議が行えるようにする。 |
|--|

なお、研修に当たっては、以下の2点に留意する必要があると考える。

1点目は、受講者のキャリア教育における認識の程度に対応した研修とすることである。中堅研受講者調査において、表5に示した10項目のうち、教員が自分にとって必要だと思う研修内容の項目について5つを上限として選択した結果、キャリア教育に「難しさを感じている」教員は、キャリア教育や「キャリア・パスポート」の意義に関する基本的な内容を選択した者が多い傾向が見られ、「あまり難しさを感じていない」教員は、学年間の学びや各教科等の学びを繋げることにに関する内容や、繋げるための学級活動の工夫に関する内容を選択した者が多い傾向が見られた。学年間や校種間の学びを繋ぐ意義については、差が少ないことから、どの教員にとっても必要な内容であるといえる。

教員がキャリア教育についての理解を深める過程として、「学びの接続」に関わる部分については、キャリア教育に対する一定の理解の上に認識できることであると考えられる。表2に示した研修内容A・B・Cでいうと、A「キャリア教育の概要に関すること」と、B「キャリア教育の実践に関すること」の内容・要素を踏まえることで、Cの「体系的・系統的なキャリア教育に関すること」について理解が深まると推察される。

2点目は、内容や意義の理解に止まらないように、「自分ならどのように実践するか」という具体的なイメージを教員がもてるように、研修内容の工夫や働きかけを行うことである。前述したように、数々の教員向けパンフレットが提供され、多くの事例が紹介されている。本県でも、これまで作成してきたキャリア教育に関する指導資料に加え、「小・中・高12年間を繋ぐキャリア教育充実事業」の一環として、小・中・高それぞれの校種での授業実践の映像資料を作成している。

今回の研修では、小・中学校の教員を対象とした演習の中で、小学校での授業実践の映像資料を用いて、学級(HR)活動(3)の具体をイメージできるようにした。高等学校の教員を対象とした演習では、高等学校版キャリアノートモデルに加え、小・中学校の「キャリア・パスポート」を見る機会を設けた。学級(HR)活動(3)や「キャリア・パスポート」の意義は実感していたものの、具体的な実践に難しさを感じていた教員も、今回の演習を通して実践に向けた大まかな方向性を掴めたと考える。加えて、授業実践の映像資料を見た後で、授業者の意図を読み取る活動を取り入れたことで、自身が扱いたい題材に置き換えて考えることができた。また、高等学校の教員が小・中学校の「キャリア・パスポート」を見た後で、校種(小・中・高・特)を交えた協議を行ったことで、漠然と掴め

ていたイメージが、自身の実践に向けたより明確なイメージになったことがうかがえた。校種を交えた協議は、具体的な実践の接続をイメージできるため、系統的なキャリア教育の意義を実感を伴って理解することにも寄与すると考えられる。

今回のモデル案には取り入れられなかったが、実践に結び付ける工夫として、児童生徒への声かけや「キャリア・パスポート」等へのコメントを具体的に考えるとといった要素を研修に取り入れることも考えられる。

一方、中には、これらの資料を初めて見たという受講者もあり、周知及び活用は喫緊の課題といえる。既存の授業実践や活用事例が分かる映像資料やリーフレット等を、その周知を兼ねつつ、積極的に活用した研修を計画することが望ましい。

児童生徒の学びを繋ぐという特別活動を要としたキャリア教育の本質に迫る上でも、既存の資料等を活用して具体的なイメージをもてるようにした上で、児童生徒の気付きや学びをどのように繋げることができるのかを、実践に落とし込んで考えられるように留意することも必要である。

おわりに

キャリア教育に関する教員の指導力向上のために、教員がキャリア教育についての理解を深める過程に即した研修内容や、研修において有効な視点を明らかにする必要があると考え、本研究では、体系的・系統的なキャリア教育に資する教員研修には、どのような内容や要素が必要か、またどのような視点が有効かを明らかにすることを目的とした。

この目的については、教員研修モデル案によって教員の理解がどのように深まり、認識がどのように変容したのかを、ある程度明らかにすることができた。また、アンケート調査等からは、教員のキャリア教育に対する認識や、実践する上で感じている難しさ等の課題を明らかにし、個々の教員のニーズや理解度に対応した研修内容も見えてきたところである。

今回の研究では、先に挙げた本県の課題①～⑤の内、課題①・②・④・⑤については、教員研修に必要な内容や要素、有効な視点等を明らかにすることができたと考えられる。しかし、「教科・科目や教育活動が、キャリア教育の一部に繋がっていることが意識できていない。」という課題③については、今回のモデル案では、体系的なキャリア教育については触れたものの、特別活動以外の教育活動や教科・科目の中で、どのようにキャリア教育の視点を取り入れるかを考えたり、実践の具体を考えたりする要素は入っておらず、この課題に必要な研修内容を十分実施することはできていない。

他に、キャリア教育の改善を意図した要素や、キャリア教育の全体計画や年間指導計画の立て方や見直し方等の要素が今回作成した研修内容には入っていない。しかし、キャリア教育の意義や定義に関する要素を理解することが、キャリア教育の見直しや改善に向けた視点に繋がることが、受講者の振り返りの記述から推測された。

「教科・科目や教育活動の中で具体的に実践できる力の向上」と、キャリア教育の全体計画や年間指導計画の立て方や見直し方は、体系的なキャリア教育の理解と不可分である。教科・科目や教育活動を通じた学びの接続（横のつながり）の要素と、焦点化した基礎的・汎用的能力を軸に、課題に対応した研修内容を発展的に構成することが必要である。

キャリア教育という言葉が示された、平成11年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」から24年が経つが、キャリア教育が必要とされた当時の社会情勢と比べても、必要性はさらに高まっており、体系的・系統的なキャリア教育が求められている。そのために、まずは教員の指導力向上を目指し、今回明らかになった知

見を基に、小・中・高・特 12 年間を繋ぐ、体系的・系統的なキャリア教育を充実させるための教員研修プログラムを策定していきたい。

注)

- 1) 「キャリア・パスポート」は、文部科学省からの平成 31 年 3 月 29 日付事務連絡『『キャリア・パスポート』例示資料等について』において、「キャリア・パスポート」の名称や定義、目的等を整理されたものが示された。そして、令和 2 年 4 月より、すべての小学校、中学校、高等学校において実施することとされた。
- 2) キャリア発達を促す様々な学習経験や活動の記録などを児童生徒自身が書き込むノートである。このノートは、教職員が児童生徒の成長や変化を定性的・定量的に評価し、一人一人の指導・支援に役立てるために重要な資料とすることができる。(出典：『令和 5 年度 指導の重点 2023』 兵庫県教育委員会事務局教育企画課発行) 兵庫県では、小学校版と中学校版、高等学校版のキャリアノートモデルをそれぞれダウンロードできるようにしており、各学校において、キャリアノートモデルに掲載している内容に加え、日常のワークシートや学校行事の記録、学習の振り返り等をポートフォリオとして蓄積した独自のキャリアノートを作成している。
- 3) 兵庫版「キャリア・パスポート」は各学年 A 4 サイズ 2 枚分(両面 1 枚)で、小・中学校では、各学年のキャリアノートにあわせて各学年の「キャリア・パスポート」を活用し、学年が上がるときには、それらを引き継ぐ。さらに、小学校から中学校、中学校から高等学校という校種を越えて引き継ぐ際には、「キャリア・パスポート」のみを引き継ぐようにし、その際、キャリアノートは各個人で保管することとしている。
- 4) 本文中では、以下、「キャリア・パスポート」と表記するが、一般的な名称としての「キャリア・パスポート」と区別する場合のみ、兵庫版「キャリア・パスポート」と表記する。
- 5) キャリア教育推進講座とは、当教育研修所で実施する「(小・中) キャリア教育推進講座」と「(高) キャリア教育推進講座」を指す。小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員を対象としている。
- 6) 抽出対象は、小学校 40 校、中学校 40 校、高等学校 20 校である。小・中学校は各市町から各 1 校を抽出し、小学校の内 17 校、中学校の内 18 校は、過去の兵庫県キャリア教育関連事業の研究推進校である。小学生は 5・6 年生 4239 名、中学生は 1・2・3 年生 7329 名、高校生は 1・2・3 年生 2112 名、教員は小学校 129 名、中学校 279 名、高等学校 179 名を対象として調査を実施した。
- 7) 兵庫県内 6 地域から 1 名ずつ、計 6 名の中学校教員と、県立高校の教員 6 名が参加し、兵庫版「キャリア・パスポート」の効果的な活用に向けた説明を聞いた後、中学校と高等学校での「キャリア・パスポート」の活用の実態を出し合うことを通して、キャリア教育で身に付けさせたい力について共通理解を図ることを目的として協議等を行った。
- 8) 中堅教員資質向上研修として、当教育研修所が実施する「共通研修Ⅳ」を受講した者を指す。
- 9) キャリア教育の視点とは、社会的・職業的自立を念頭に置きながら、子ども達の成長や発達を促進しようとする見方を持つことを指す。(キャリア教育をデザインする「今ある教育活動を生かしたキャリア教育」—小・中・高等学校における年間指導計画作成のために— 文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 平成 24 年 8 月)

文献

- 中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」.
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2020)キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書.
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書.

課題に対応した研修の要素と具体的な記述例

大府 市	研修の 要素	小カテゴリー	具体的な記述例		
			研修前の認識や取組状況	研修で理解したことや研修後の認識等	
A キャリア教育の概要	キャリアの意味		中) 職業人としてのキャリア教育(とりあえず進路指導)としか考えていなかったかもしれない。	中) 職業人、家庭人、地域の一員としての様々な役割というキャリアの定義を確認し、(今までの実践は)仕事全てという意識を植えつけてしまい、将来の幸せとほど遠くなっているのではと感じた。将来の選択肢を与えるだけでなく、生徒の考えを引き出す活動ができればと思う。	
	キャリア教育の定義	キャリア教育の見直し	小) 子どもたちがどの職業に就くかという狭い話ではないと分かった。	小) キャリア教育の内容を理解できたことにより、自分自身の実践がキャリア教育の達成に向かっていたと実感した。学習活動の中で、どういった学習がキャリア教育に位置付けられるのか見直していきたい。	
			小) 将来どの子も幸せに暮らしていけるように力をつけることがキャリア教育であると知り、どの教育活動にも、どの言葉がけひとつにも意図をもって指導に当たらなければならないと強く感じた。	小) 将来どの子も幸せに暮らしていけるように力をつけることがキャリア教育であると知り、どの教育活動にも、どの言葉がけひとつにも意図をもって指導に当たらなければならないと強く感じた。	
			小) 進路指導という側面ばかり意識していたため、低学年だからキャリア教育はまだ始められないと思っていた。	小) キャリア・パスポートだけでなく、どのような活動がキャリア教育に繋がっていくのか考えていきたい。	
		キャリア教育と進路指導との関係	高) キャリア教育と聞くと、どうしても進路指導と混同して考えがちであった。	高) より幅広く人生全体を見通し、生き方を考えさせる教育であることが分かった。生徒に様々な体験や知識を提供したり、自己理解を深めさせたりすることが必要で、体系的・系統的な指導を行うことが大切だと感じた。	
			基礎的・汎用的能力	小) キャリア教育は職業、夢、進路などのイメージだった。	小) キャリア発達を促していくことや、身に付けさせたい基礎的・汎用能力を明確にして取り組みたい。2 学期以降の計画の中で、どの教科のどの単元と繋げるのがよいかを考えたい。
				特) キャリア教育と聞くと、どうしても進路や就労指導だけをイメージしてしまいがちだった。	特) すべての教育や取組がキャリア教育に繋がるということが分かった。目の前の生徒が、家庭人、職業人、地域人として自立するためにどのような力を身に付ける必要があるのか、基礎的・汎用的能力を基に支援・指導していきたい。
		小) キャリア教育は、キャリア・パスポートだけを何となくやっていた。	小) 具体的にどんな力を付けさせたいか、焦点を当て絞ってみたい。		
			特) 変化に対応し、社会的・職業的に自立できる力を育むことの必要性をより感じた。どのように取り組めば、生徒たちにバランスよく基礎的・汎用的能力を身に付けさせることができるのかについて考えたい。		
	キャリア発達	子ども・若者のキャリア発達	小) キャリア教育は進路指導や職業・就労という意識が強かった。	小) キャリア発達は、自然に獲得されるものではなく、子どもの発達段階や発達課題の達成によって発達していくと知り、キャリア教育の重要性を知ることができた。	
			小) 今までは、キャリア教育の基本的な部分と、大まかな枠組みしか知識がなかった。	小) 日頃の教育的活動の全てがキャリア教育であり、キャリア発達につながることを学んだ。	
			小) 今までは、キャリア教育の基本的な部分と、大まかな枠組みしか知識がなかった。	小) 小学校でのキャリア教育を推進するにあたって、発達段階に応じて、自分の役割、互いの役割、社会や仕事における役割等を意識させたい。	
			中) キャリア教育について、これまで学校で自分が主として関わったことがなく、担当の先生から出されたものを担任としてこなしていただけだったように思った。	中) キャリア教育は発達段階や発達課題の達成と深く関わりがあり、小・中・高の繋がりが大切であると改めて学んだ。中学校ではまず、自分の役割との関係を考え責任をもつことや、さまざまな活動の中で小さな失敗や成功の体験を積み重ねることを生徒に与えていきたいと思う。	
		職業に関する体験活動	小) 中学校・高等学校でのキャリア教育の内容と流れを理解した上で、小学校での取組を進めることの重要性を実感しました。中学校でのトライやる・ウィークのことを児童に日常的に話すなど、今までの取組を活かしながら、キャリア教育の指導の内容の充実を図っていきたい。	小) 中学校・高等学校でのキャリア教育の内容と流れを理解した上で、小学校での取組を進めることの重要性を実感しました。中学校でのトライやる・ウィークのことを児童に日常的に話すなど、今までの取組を活かしながら、キャリア教育の指導の内容の充実を図っていきたい。	
			中) トライやる・ウィークを担当した際は事業所へ 5 日間参加するための事務的な指導やマナーの指導が中心となり、トライやるウィークをすることの教育的な意義や価値にまで深めることができなかった。	中) 今まで体系的に行っていなかった、もしくは意識していなかったキャリア教育の体験活動を、見直しをもって行うにはどうすればいいかを学びたい。研修で学んだことを、現在の教育課程にどう組み込んでいくことが出来るのかをしっかりと考えていきたい。	
B キャリア教育の実践	キャリアノート	高等学校版キャリアノートの活用	特) キャリアノートを今回初めて学び、授業で使えるような項目や内容が多いことに驚いた。LHR や自立活動や総合の授業を用いて、どんどん活用したいと思った。		
	キャリア・パスポート	経験の捉え直しと再構成	中) キャリア・パスポートの活用で、経験の捉え直しや再構成をするのはとても大切だと感じた。幼児教育から高校までの学校生活の中で、繋がりをもってキャリア発達にかかわる能力を付けていく必要があると感じた。		
	目的と意図をもった教員の言葉かけ		中) 授業動画を視聴して、キャリア・パスポートを使ってあれだけの授業ができるのだと驚いた。これからは、動画に登場されていた先生のような声掛けを意識して関わっていききたいと思った。キャリア・パスポートは人生のアルバムだと伝え、生徒たちに書かせたいと思った。		

C 体系的・系統的なキャリア教育	キャリア・パスポートで繋ぐ意義	小) 小・中・高と引継ぎのところでのようにキャリア・パスポートが活用されているか知らなかった。	小) 中学校や高等学校に繋げていくために、具体的にどんなことを小学校でやっておけばよいかを考えながら、キャリア教育を指導していきたい。	
		児童生徒理解	小) キャリア教育の授業実践の映像を視聴したり、中学校の先生と意見交流をしたりしたことで、キャリアを振り返り意思決定する時に、キャリア・パスポートが重要な役割を担っていることを知った。	
		活用場面の工夫	中) キャリア・パスポートの有効な使い道が見出せていなかった。	中) キャリア・パスポートは、個人の頑張ってきたことや、どのような人と出会い、関わってきたのかが、分かりやすくまとめられているものだと思うので、それを教員が知ること、生徒は知ってもらえている安心感をもてると繋がると思う。
			中) キャリア・パスポートは、決められたタイミングで書かせるだけだった。	高) 小・中の先生方と話をし、キャリア教育の引き継ぎの大変さを感じたが、子どもの頃のようなことを考えていたのかなど、もっと生徒の背景を知ることは大切だと思った。
			高) キャリア・パスポートは書かせるだけのものになっていた。	高) キャリア・パスポートは、進路指導のみならず、深い生徒理解のために必要であることが分かった。
		活用する上での指導の工夫	中) キャリア・パスポートをあまり活用できていないことが分かった。	中) キャリア・パスポートを学習についても活用していけることが分かっていた。小学校からのキャリア・パスポートを活用しないもったいないので、学校、学年で活用法を考えていきたい。
			中) 教育相談や三者懇談など、家庭と連携するツールとしても使えると思った。	
			高) 進路指導にも使えそうなことが分かった。また、生徒それぞれの自己効力感が上がるような視点で見していきたい。	
	特別活動を要としたキャリア教育	特別活動を要としたキャリア教育の意味	中) 一方的な進路学習に偏ったキャリア教育になってしまっていた。キャリア・パスポートを書かせるだけで終わっていた。	高) キャリア・パスポートは、総合的探究の時間に活用できる。
		特別活動を要としたキャリア教育の具体		小) キャリア・パスポートを書くだけではなく、振り返り、基礎的汎用能力の育成に繋げていきたいと感じた。
				中) 書かせて終わりではなく、書かせた後の活用方法や書かせ方にも色々な工夫が必要である。
	学びの接続	学年や校種を越えた学びの接続(縦のつながり)	中) 一方的な進路学習に偏ったキャリア教育になってしまっていた。キャリア・パスポートを書かせるだけで終わっていた。	特) キャリア・パスポートの内容が分かったので、使ってみよう。普段の授業で実践していることの一部分を記録しておくことが、キャリア・パスポートになると思う。また、個別の支援計画に盛り込むとしたら、どのような形になるかを考えてみたいと思った。
			中) キャリア・パスポートに返事を書いたり、過去と比べたりして活用していきたい。特別活動を、生徒の学びを繋げる核として捉えて、普段の学級活動でも意識していきたい。	
			小) キャリア・パスポートを使った学級活動の動画を見て、実際に自分の学級でもやってみようと思った。自分で見つけ直すことはもちろん、他者からの評価もとても大切だと思った。子どもたちに語る、語らせる、語り合わせることを積極的に取り入れていきたい。	
縦のつながりと横のつながり			小) 学年はじめの目標など書かせて終わるのではなく、目標に向かってどんなことができるのか、具体的な方法を書かせたり、途中で自己評価させたりすることで、自己を振り返らせ、そこからどうやっていくのか調整したり、目標に向かって努力を続けたりする力などが備わっていくのではないかと感じた。	小) 小学校だけではなく、校区の小・中学校などと連携して同じ目標に向かっていかなければならないと思った。中学校や高校での取組は知らないことも多くあったので、自分の中学校区での取組を聞いていきたいと思う。
			中) 本校では、学校でキャリア教育を系統的にしていない。職業調べや進路学習はしてきたが、普段の生活との繋がりは全く考えられていなかった。	中) 変化が激しい今の時代を生き抜くために、小中の連携はもちろん、中高連携もよりしていくべきだと感じた。
			高) 中・高の連携を大切にし、生徒の可能性の幅を広げたい。	高) 小学校や中学校でのキャリア教育の実態や、高校生が小学生や中学生の時にどのような進路を考えていたのかを知ることも含め、小・中との連携の必要性を感じた。学校行事とキャリア教育との関連や、小・中との連携を深めたいと思った。
教科・科目や教育活動を通じた学びの接続(横のつながり)	小) キャリア教育を、あまり意識することができていなかった。	小) 子どもの過去・現在・未来を繋ぐ、教科を繋ぐことを念頭に置いて、学びを繋ぐキャリア教育を実践したい。キャリア教育は小学校がスタートなので、中学校、高校へ確実に繋いでいきたい。	小) 教科との繋がりと特別活動との繋がりを具体的に知ることによって、関連付けて教育していくことのイメージが膨らんだ。	
		小) 演習並びに協議で、各教科との横のつながりについて考えたが、他の教科や単元ではどのような実践を行うことが可能なのかを今後とも考えていきたい。	小) 演習並びに協議で、各教科との横のつながりについて考えたが、他の教科や単元ではどのような実践を行うことが可能なのかを今後とも考えていきたい。	
			小) 学校に戻って、組織的、体系的にキャリア教育を実施していくという視点をもちながら、実践をしていきたい。	中) 各教科で連携できれば、幅広い教育ができると思う。校内研修でキャリア教育を取り上げてもらいたい。
校内の連携				

小)：小学校教員 中)：中学校教員 高) 高等学校教員 特)：特別支援学校教員

※具体的な記述例にある研修前と研修後の認識は、同一の受講者の記述を併記している。